

寺澤 盾 著

『英語の歴史——過去から未来への物語』  
(「中公新書」1971)

英国では、1986年BBC(英国放送協会)で放送された *The Story of English* (岩崎春雄ほか共訳『英語物語』文芸春秋、1989)と2003年民放で放送された *The Adventure of English* (三川基好訳『英語の冒険』講談社、2008)のように、一般を対象にした英語の外面史がジャーナリストや小説家によって放送と同時に出版され、日本では視聴覚教材としても重宝された。近年 Mugglestone 編集の英語史(2006)を始め、英語学の専門家によって英語の歴史が語られることも多い。日本でも2008年から2009年にかけて、英語史に関する出版が相次いだ。小野茂著『歴史の中の英語』(南雲堂)、田島松二・末松信子編『英語史研究ノート』(開文社出版)、武内信一著『英語文化史を知るための15章』(研究社)と本書(中公新書)である。『英語年鑑〈2009年版〉』(研究社)の「英語史の研究」において、寺澤芳雄氏は「カリキュラムにおける‘英語史’軽視とい

う逆境の中で、英語史研究の伝統を継承・保持しようとする研究者の意識の現われと期待したい」と言う。このように、内外を問わず、近年英語史に関する著書や論文が多く書かれていることは事実である。本書は、『朝日ウィークリー(Asahi Weekly)』に連載された記事を基に、若年層を対象にした広い読者層を視野に入れて書かれたものである。将来の英語史研究への「危惧の念」を打ち消すような、若い学生たちの学習意欲を掻き立ててくれる新書版である。

第1章は、H. G. ウェルズの予言、共通語としての英語、英語の使用者数、英語産業、国際色豊かな英語語彙について説明される。ここだけを読むと、本書は、英語史というよりも、今日の英語の社会言語学的な入門書のような印象を与える。第2章から歴史に入る。英語とドイツ語の類似、ゲルマン語派と印欧語、グリムの法則、ヴェルネルの法則について語られる。従来の英語史である。ただし、本文とは別の欄に『ドイツ語辞典』『グリム童話』のことまで解説されているので、英語の先史時代が身近になる。第3章からは本番の英語史である。語彙と文法の変化、本来語と北欧語・ケルト語・フランス語・ラテン語・ギリシア語からの借用語の使い分けなどが説明される。英国のチャーチル元首相が行った第2次大戦中の名演説には、本来語に秘められた力の強い響きがある。近代英語期では、借用語も国際化し、今までの英語史でマイナーであった日本語からの借用語も扱われている。OED Onlineのお陰で英語の実態が即座に把握できる。借用語によって英語が増大していったことがよく分かる。第4章は、綴り字・発音・文法の変化である。なぜ綴り字と発音の対応は不規則なのかという素朴な疑問に対して、大母音推移やコックニーの発音などの説明を

通して、解決の糸口を提供してくれる。次に、尊敬の二人称複数代名詞の用法は英語の敬語表現を意識させるし、助動詞の意味変化の方向性と文法化現象は今日のホットな話題へと導いてくれる。第5章の英語の拡張では、イギリス英語とアメリカ英語、アメリカ黒人英語、新英語、ピジン・クリオール英語という世界に広がる英語の諸相が紹介される。特に、Harry Potter のイギリス版とアメリカ版における英語比較は、今後英語教育に応用できそうである。第6章では、コンピュータや生命科学などの科学技術の進歩、環境問題、差別撤廃運動、性差とフェミニズムという従来の英語史では十分に扱えなかった今日的な言語問題を扱っている。終章では「国際語としての英語」の今後の姿を論じて、英語がさらに国際化していくことを予測している。

今の英語教育では、現代英語を自由に駆使するコミュニケーション能力の育成に重点が置かれ、英語の歴史的説明に時間をかける余裕はない。しかし、生徒が抱いた英語への素朴な疑問に対して、一つの答えが英語史の知識から得られることがよくある。本書は、生徒たちに異文化理解を考えさせるための絶好の英語教材に成り得るものである。今日軽視されがちな虚学や無用の用を論じる英語史研究への橋渡しになることをも期待するのは、欲が深すぎるであろうか。(中央公論新社、2008年10月、新書判 viii+242頁、780円)

——地村 彰之 (広島大学教授)